

研究グループ紹介

移植グループ



渋谷 一陽 (2010年卒)

肝細胞移植における球状肝細胞の有用性の検討

大学院研究3年目の渋谷一陽です。肝細胞移植における球状肝細胞の有用性について研究しています。この研究ではマウスの初代肝細胞の培養、球状肝細胞の作成、作成した球状肝細胞の移植という3段階のハードルがあります。1-2年目でIn vitroでの球状肝細胞の作成に成功し球状肝細胞の機能評価を行うことができていましたが、なかなかIn vivoでの移植後の球状肝細胞の生着を評価することができませんでした。しかし、3年目でなんとか球状肝細胞移植後のグラフト機能評価まで行うことができ、病理学的にも存在証明を得られました。今後はこれまでの結果のまとめと、球状肝細胞移植後の免疫反応の評価、異所性肝細胞移植についてさらなる知見を得たいと思っております。



金沢 亮 (2011年卒)

Memory T細胞による免疫寛容機序と早期グラフト浸潤細胞の関係

消化器外科 I の金沢と申します。現在医師9年目で、大学病院や地方病院で外科医として修練を積み、前年度よりリサーチとして研究を行うため大学に戻りました。現在は移植グループに属しており、「Memory T細胞による免疫寛容機序と早期グラフト浸潤細胞の関係」というテーマで研究に従事させて頂いております。マウスの皮膚移植モデルを用いた研究で、移植した皮膚に浸潤してくる細胞のうち早期にグラフトに浸潤する細胞は拒絶を惹起しないことが示されています。これを発展させ最終的には現在よりも有害事象の少ない免疫抑制剤の開発に繋げることを目的にしています。思うような結果がなかなか出ず苦労していますが、最近になり上級医の指導もあり少しずつデータを残せるようになりました。このデータを積み重ね医学の発展に寄与していきたいと考えております。



太田 拓児 (2012年卒)

早期グラフト浸潤細胞における免疫抑制性の検討

今年度より大学院に入りました太田拓児と申します。私の研究テーマは早期グラフト浸潤細胞の抑制性の検討です。マウス移植モデルにおいて、移植後早期にグラフトに浸潤するリンパ球の詳細な役割はわかっていません。そこで、早期に浸潤するリンパ球の役割と特徴を明らかにすることが目標です。具体的には、早期グラフト浸潤細胞のうちエフェクターリンパ球を抑制できる細胞集団が存在するかを解析する予定です。この研究のためにはVivoのモデル作成が重要であり、マウスの心移植のトレーニングを行っております。また、抗CD80/86抗体を用いてAnergy細胞を作成し、これを移入した免疫寛容マウスの作成も並行して進めております。最近は実験やモデル作成がうまくいかない日は落ち込むことが増え、気づいたら半年が過ぎました。3年の期間内に研究を仕上げることはかなりタフな仕事だと感じています。